

【準特選】

争いの無い社会へ

東部中学校 三年 大島 美空

ドゴオンと激しい音と共に戦闘機は空母目掛けて追突していった。私は目の前の映像が信じられなかった。歴史の授業では、第二次世界大戦が終戦する少し前のところを習っていた。第二次世界大戦といえば、太平洋戦争や、原爆投下、ひめゆり学徒隊などの言葉が思い浮かぶ。毎年終戦の日にニュースや新聞などで目にする言葉だ。でも私は、その日初めて神風特攻隊という言葉を知った。神風特攻隊とは、アメリカ軍を本土に入れないために隊員が戦闘機に乗って身を挺してアメリカ軍の侵攻を止めるというものだった。驚いた。まるで人の命が消耗品のように扱われてい

るように思えてとても悔しかったし、悲しかった。命を乗せた戦闘機が、アメリカの銃弾によって一機、また一機と海に沈んでいき、その隣では怯えもせず戦闘機が空母を目掛けて追突する。映像の中だとしても、人の命が目前で消えるのを見るのは、とても耐えられなかった。隊員の中で、奇跡的に生き延びた人の話には

「敵国を倒し、国のために死ぬるのありがたいというような教育を受けたため、命を捨てて闘うことに何の疑問も抱かなかった。」

とあり、とても驚いた。今の世の中なら、こんな話間違っていると誰もが思うだろう。でも当時は、これを受け入れなければならなかった、当たり前だったと思うと恐ろしい。私が隊員だったら、家族と離れ、国のために命を捨てて戦うなんて嫌だ。隊員の人にも、それぞれ家族がいて、戦争

さえ無ければ家族みんなで楽しく暮らせていたかもしれないと思うと心苦しかった。また、特攻隊の食事の世話をしていたトメという女性は、

「隊員を見送る時が一番辛かった。燃料が片道分しか入っておらず、もう二度と会うことができないから。」

と、おっしゃっていた。我が子のように愛情を持って接していた隊員が、命を落とす前夜、感謝の言葉、別れの言葉を告げに来るとき、どんな思いでいたか、当日、どんな思いで隊員を見送っていったかと思うと計り知れない。

明日にはもう消えてしまう命を最後まで涙一つ見せず、笑顔で見送ったトメさんは、とても強い人だと思う。

「戦争は、殺すか殺されるかだ。」

この言葉は、戦争を体験した多くの人から聞く言葉だ。

誰もが人を殺したいなと思うはずがないのに目の前の人を

殺さなければ、自分が殺されてしまう。ただただ、多くの命が失われていくだけで、残るのは、悲しみ、怒り、憎しみだけで、良いことなど一つも無い。

いつ、何ときも多くの命が消える、それが当たり前になるのが戦争。二度と繰り返してはいけない。でも世界では今でも各地で紛争が絶えず、ロシアのウクライナ侵攻などの大きな戦争も起こっている。あの地獄のような日々を今も送っている人がいる。私は、そんなこと絶対あってはならないと思う。毎日のように、友達が、家族が、誰かが死んでいく。

私は、その戦争の恐ろしさを次の世代に伝え、あんな思いをする人がいなくなるような、平和な社会にしたい。